

Title	近代日本地域形成史の研究
Author(s)	一色, 哲
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40122">https://hdl.handle.net/11094/40122</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	いっしきあき 一色 哲
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 12897 号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	近代日本地域形成史の研究
論文審査委員	(主査) 教授 広田 昌希  (副査) 教授 中村 生雄    助教授 杉原 達

#### 論文内容の要旨

本論文は、1870年代から1910年代まで、つまり日本近代国家の形成期から帝国主義へ移行するまでの時期の地域形成の歴史を、「ネットワーク」という概念によって再構成しようという意欲的な研究である。「ネットワーク」という概念は、この二、三十年來、世界各地でさかんとなってきた市民運動の中から生まれ、アメリカの社会学者たちによって学問的にも洗練され日本に入ってきた概念であって、決して本論文のオリジナルではないが、主として運動の分析などに使用されているこの概念を、歴史像の再構成のために使用したところに本論文のオリジナリティがあるといっ  
てよいだろう。

本論文は、序論と本文第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、結論で構成され、約19万字、四百字詰原稿用紙で475枚に相当する。

序論「課題と方法」では、近代国家は不均等な関係を前提とした均質化の作業を全国的に押しすすめるが、果してそれはどれだけ実現したのか、近代日本の地域形成にあって、それらと異質な自立性をもった秩序形成はみられなかったのかと問いかけ、それを明らかにするために「ネットワーク」概念が重要だと指摘し、研究史を整理しながら、「ネットワーク」を自立的で選択縁的な人と人とのつながりとして定義（したがって、体制的なネットワークは「システム」とよぶ）、また「地域」の概念をそうした「ネットワーク」のかたまり、範囲としてみなして、そうした「地域」の秩序形成のありかたを明らかにするのが本論文の課題だという。

第Ⅰ部「地域社会におけるネットワーク形成」は全4章からなる。第1章では、歴史の中の情報の問題をとりあげ、幕末期に形成された「ぶあつい政治情報需要者層の社会的存在」こそが民衆的諸文化を発展させる土台となったとする宮地正人『幕末維新期の文化と情報』を、歴史の中でネットワークを考えるための貴重な成果と位置づけながらも、しかし地域におけるネットワーク形成はもっと動的なものとしてとらえる必要があることを提起する。そのもとで、第2章以下では、岡山県下の高梁地域における1870年代から1880年代にかけての地域社会の創出過程を究明している。この時期は、全国的に自由民権運動とキリスト教布教活動が活発に展開した時期だが、従来の研究は両者を別々のものとして扱ってきた。しかし、この地域のそれらの活動に従事した人々のつながり（ネットワーク）を具体的に追跡していくと、それは幕末以来の藩校や私塾における人脈を背景にしながら、政府とはちがった文明開化を志向するネットワークとして形成されてゆくことが分かり、自由民権家もキリスト者も同じネットワークにあり、そのネットワークこそが高梁地域に新しい文化と社会秩序をつくりだしたことを論証する。

第Ⅱ部「近代化による地域社会の変動と動揺」は全4章からなるが、同じ高梁地域で起こったキリスト者たちのリヴァイヴァリズムをとりあげ、そのリヴァイヴァル運動がキリスト教大迫害を招きながらも、和解がはかられ、地域の再統合をもたらすとともに、地域の周辺にあらたなネットワークを生みだし、従来よりも広範で重層的な地域秩序が形成されることを論証する。そうした作業のなかで、これまでキリスト教史研究では軽視されてきたリヴァイヴァル運動の意味を問い直し、おもにアメリカ史におけるリヴァイヴァル運動と対比しながら、国民国家形成との関連でとらえるべきことを指摘し、その運動には中央型と辺境型があると分類、高梁では中央型として起こった運動が辺境型に転化し、それが大迫害事件を呼び起こしたことのメカニズムを分析している。大迫害事件の和解後は、キリスト教の教勢が伸長し周辺地域への伝道が活性化することを人々の動きとつながりのもとで示し、さらに高梁脚気病院や順正女学校の設立がたんにキリスト者のみによるものでなく、非キリスト者の協力のもとになされ、そこにあらたな地域ネットワークの形成がみられることを論証するが、しかしそのネットワークには、キリスト教の自立性よりも社会との妥協をはかる傾向が強まったことを指摘している。

第Ⅲ部「地域社会の均質化とネットワークの消長」は全3章からなり、1890年代から1910年頃までの時期のキリスト教界の問題を、キリスト教メディアの変化とそれともなう伝道集会の変容を中心に検討している。メディアの変化とは、日清戦争を契機に大衆化していく洋式音楽隊と幻灯が、伝道活動にも積極的に利用されることをいうのであり、「基督教大幻灯会」や「大音楽会」の催しは、文明の最先端を経験できることへの驚きやあこがれを生むこともあって、これまでになかった大規模の集会を可能にしたことを指摘するとともに、それに対応するかのよう「慈善音楽会」など善意を強調した伝道集会が増えることに注目する。それは1891年の濃尾大震災に対する救援活動で、さらには96年の三陸大津波でフルに利用された。そうした「慈善」活動は大衆動員を可能にするが、同時に「確固とした信念」がなくとも参加する人々の増大をも意味し、大衆化とともに世俗化を推しすすめることになったとする。その最も大きな試みが1901年から翌年にかけて展開された「二十世紀大挙伝道」で、それはキリスト教界中央の指導者が意図的につくりあげた中央型リヴァイヴァルであり、音楽隊や幻灯隊がフルに活用されて、各地での伝道を活性化させ、中央から地方への均質化をすすめることになったが、それはまた帝国意識（体制イデオロギー）を自分のものとしていく過程であったとする。そして、そうした趨勢の中にあつて、教界中央の動きとはちがった自立的な活動として、石井十次の指導する「岡山孤児院音楽幻灯隊」に注目し、その活動を具体的に掘り起こしながら、岡山を中核として九州の日向や大阪へとネットワークが拡大していくことを論証する。そして、石井らの伝道は、中央の「大挙伝道」が「慈善」のためであったのに対し、「地域を越えて信念で結ばれた人々の救済」のための伝道として自立性をもったが、帝国意識にからめとられる傾向をも内包したとする。

第Ⅰ部では、1870年代から80年代にかけて、下からの文明化をめざす地域ネットワークを論じ、第Ⅱ部では、1880年代から90年代にかけて、その地域ネットワークが周辺に拡大することを示し、第Ⅲ部では、1890年代から1910年前後にかけて、岡山・九州・大阪さらには東京と全国的なひろがりをもつ地域ネットワークの形成が問題とされる構成であり、それらは政府や教界中央とも異なる下からの自立的な秩序の形成をめざすものであったが、ネットワークの拡大とともに体制のシステムに同調せざるをえなくなる姿を描き出したといえよう。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、「ネットワーク」概念によって近代日本における地域形成の歴史を再構成しようという野心的な試みである。「ネットワーク」概念は歴史学の概念としてまだ成熟しているとはいえないが、近代日本の社会史的研究、文化交流史研究に新鮮な視点をもちこむものであり、これまでともすれば固定的にとらえられがちであった「地域」概念にも反省をよび起こし、動的で立体的なものとしてとらえることの必要を提起したのものとしても評価することができよう。

評価すべき点を具体的に挙げると、第一に、従来の研究では自由民権運動とキリスト教運動とは別個のものとして扱われ、せいぜい群馬県廃娼運動における両者の協力関係が論議される程度であったのに対して、本論文は「ネットワーク」の視点から、個々人の動きをたんねんに跡づけていくことによって、自由民権運動の担い手とキリスト教運

動の担い手とは重複する人が多く、運動の方からみるよりも、多様な次元を含み込んだ地域のネットワークの形成としてとらえる必要があることを指摘し、そうしたネットワークの担い手こそが地域秩序を形成していくことを論証することによって、新しい視野を切り拓いた点を評価したい。第二には、日本におけるキリスト教のリヴァイヴァリズムの再評価が試みられた点を挙げることができよう。従来の研究は、リヴァイヴァリズムを無視または軽視してきたといえようが、本論文は欧米のキリスト教の近代におけるリヴァイヴァリズムとの比較を行って、リヴァイヴァリズムには中央型と辺境型があるとし、中央型が教界中央による、したがってまた近代国家による国民の均質化を推進するエネルギーを提供するものであったのに対し、辺境型はそれと異質でしばしば秩序に混乱をもちこみ、当時の他の民衆宗教にも通じるところの世直しの志向をも内潜させていたのであって、そこには国民の均質化とはちがった独自の秩序形成の可能性もあったとする点は注目されよう。第三に、音楽隊や幻灯隊など新しいメディアによる伝道の意味を、さまざまな史料を駆使して検討したのは初めての試みといってよいであろうし、それらの活用が伝道の大衆化へのテコとなり、その大衆化が通俗化さらには体制化へと展開するプロセスを描き出しながら、にもかかわらず地域ネットワークのありかたによって自立性が保持できる可能性を石井十次に見出そうとした点、その史料蒐集の努力とともに、評価することができる。

しかし、不足も指摘しなければならないだろう。その第一は、本論文のメリットと裏腹の関係にあるが、「ネットワーク」概念の未成熟にかかわるものである。「ネットワーク」のかたまりや範囲を「地域」とみる視点は、「地域」を動的にとらえる点において画期的ともいえるが、その「ネットワーク」に属さない人々の存在が視野から抜け落ちる危険性をもっているのである。第二に、本論文は「地域」の自立性の可能性を歴史的に追求しようとしたものとみることができるが、それをもっと鮮明に示すためには、中央「システム」との対抗・緊張関係をより深く追求すべきではなかったかという点がある。これまでの歴史学があまりにもその点のみに関心を集中していたところからの反省ではあろうが、それにしても近代において「地域」は自己完結的でありえず、中央「システム」との関係をもたざるをえないからである。第三に、対象とした1870年代から1910年頃までの時期の前と後との時期についての比較や見通しが不鮮明である点が指摘できる。それ以前については宮地正人氏の成果に依りすぎているし、以後については体制化の道しかないように読まれかねない。第四に、第I、II、III部のそれぞれは、各々の時期の「ネットワーク」の典型を示したものであろうが、それぞれの関連性については説明不足の感がある。

以上のように、いろいろと不足はあるが、本論文が新しい研究領域を切り拓くものであること、研究者として独り立ちする第一歩を示すものとして評価できる作品であることをもって、博士（文学）の学位を受けるに十分な価値をもつものであることを認定する。